

Frankenstein を介してみるハーン

伊野家 伸一

I

島根大学外国語教育センタージャーナル第 11 号の拙稿においては、ハーンが熊本時代に体験、見聞したことをもとに著した *Out of the East* に目を向けた。そこには、国や親などのためには命を投げ出すことも厭わないという西洋人には信じ難い行動、心理を示す日本人が、その精神の根底にもつ存念は「個人的存在、感情を越え、遠く離れ、忘れられた過去の闇、祖先達の霊に宿る不朽不死の道義と意志へと遡るもの」と、とらえているハーン (Lafadaio Hearn) がみられた。

そうした同書第 2 章 “With Kyusyu Students” は、熊本で担当した学生の様子を紹介しているが、同第 4 節では、西洋の文学作品を紹介した際における学生達の反応に、西洋と日本の違いをかみしめるハーンがみられる。このあたりは上記拙稿では触れていないところであるが、*Frankenstein* について聞いた学生たちがみせた反応は次のようなものであった。

... the story of “Frankenstein” impressed them very little. None took it seriously. For Western minds the tale must always hold a peculiar horror, because of the shock it gives to feelings evolved under the influence of Hebraic ideas concerning the origin of life, the tremendous character of divine prohibitions, and the awful punishments destined for those who would tear the veil from Nature’s secrets, or mock, even unconsciously, the work of a jealous Creator. But to the Oriental mind, unshadowed by such grim faith, —feeling no distance between gods and men, —conceiving life as a multiform whole ruled by one uniform law that shapes the consequence of every act into a reward or a punishment, —the ghastliness of the story makes no appeal. (52)

ここには、人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者は、大変な天罰を受けるのだというヘブライ思想に影響されてきた西洋人とはかけ離れた日本人の意識に驚くハーンがいる。上記引用部に続けて、ハーンは「生徒の書いた批評をみると、大抵の者が、その物語を、単なる滑稽な話か、おどけ半分の例え話だと思っていることがわかった」(52) と述べている。

そこで、本稿では *Frankenstein* をハーンはどのように受け止め、解しているか、そこからハーンの如何なる面を見出せるかを考えてみたいと思う。ハーンが *Frankenstein* を通じて感じた西洋と東洋・日本における意識の相違とその根源、そこに目を向けてみることは、グローバル化された現在において我々に何らかの示唆を与えると思われるからである。

II

では、*Frankenstein* とヘブライ思想の繋がりを検討したいと思う。まず、ハーンのいうヘブライ思想なるものを確認しておきたい。ここでは、荒井章三著『ユダヤ教の誕生 「一神教」 成立の謎』を参照することにする。

同書では、初期においては羊や山羊といった小家畜を飼育していたヘブライ人（後のユダヤ人）の族長、その家族とともにあった牧歌的ともいえる神が、エジプト、バビロンに捕囚された苦境や絶望の状況下で、民の精神的支柱として次第に強化され、超越的、絶対的にして唯一の存在に変容していった様子が述べられている。そうした同書から、ヘブライ思想における神の絶対性、神のみが為しうる領域を示すものとして、次の箇所を引用しておきたい。「唯一なる神」は、ゾロアスター教アフラマズダの影響ありとする観点から、荒井が紹介しているところである。

主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。……そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」。わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じです」。そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって、予言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは、お前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる」。(「エゼキエル書」三七章一～六節、222)

ここには、死者の骨にすら霊を吹き込み、蘇らせることができる神、超越的かつ唯一神なればこそその権能がみられる。ヘブライ思想の根源を示すところといえようか。

次に、メアリー・シェリー (Mary Shelly) の *Frankenstein* の検討に入ることにする。ストーリーは、若い科学者ヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) が生命の秘密をつきとめ、理想的な人間を創ろうとする。しかし、創りあげられた人造人間は怪物のごとき姿、容貌となってしまった。このため幾多の悲劇が惹き起こされるというものである。

当作品について、榎本真理子は「……生命の神秘や、生と死の境の不思議さ、そして死のグロテスクさ以上に、生命活動の、そして生命そのものの不気味さ、おぞましさ……」(73) が示されていることが、我々に衝撃を与えるところの真実であるとみる。そして、生命活動は本来不気味なものであり、ヴィクターも人造人間の見た目のおぞましさよりも、そこに生命が宿ったためのおぞましさ、醜さに衝撃を受け、それが再三強調されるのは「科学・合理主義万能の思い上がりへの罰」という意味をはらんでいるからである (73) との見解を示している。首肯されるべき見解と考える。

また『怪物の黙示録』には、SF作家ウェルズ (Herbert George Wells) と *Frankenstein* の

関連も示されている。そこにはウェルズによる *The Islands of Dr Moreau* 『ドクター・モローの島』については、「・・・メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』との類似はつねに認識されていた」(113)との指摘がマイケル・フライド (Michael Fried) によってなされている。ウェルズは、狂気の科学者モロー博士が、孤島で動物を人間に変えよう実験を繰り返す話を描いている。よって、フライドの指摘も是認されるべきものといえよう。

さらに漫画アンパンマンの作者として知られるやなせたかしも「今なぜフランケンシュタイン」という論考を著しており、メアリーと駆け落ちした詩人シェリー (Percy Bysshe Shelly) などに触れていることも興味深いことに思える。

では、*Frankenstein* において、超越的、絶対的な神を生み出したヘブライ思想、ハーンがいうそこからの影響「人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者は、大変な天罰を受けるのだというヘブライ思想に影響されてきた西洋人における意識」との接点を感じられる箇所をみてゆきたい。上記にて確認したユダヤ教生成過程においてみられた面も、参考にしてゆくことにする。

こうした西洋人における意識との接点は、この作品が醸し出す「恐怖と不気味さ」と繋がってくることは当然であろう。特にヴィクターが解剖学を学び、人間の肉体が自然に腐敗し崩壊してゆく様を観察し、日夜地下納棺堂や死体安置室で過ごすあたりはそうした雰囲気が顕著である。

... I must also observe the natural decay and corruption of the human body. ... Now I was led to examine the cause and progress of this decay, and forced to spend days and nights in vaults and charnel-houses. My attention was fixed upon every object the most insupportable to the delicacy of the human feelings. I saw how the fine form of man was degraded and wasted; I beheld the corruption of death succeed to the blooming cheek of life; I saw how the worm inherited the wonders of the eye and brain. (52)

こうしたなかでヴィクターは生命の源、その創造を行う術を見出してゆく。そして彼は人造人間を創るために解剖室や死体処理場からその材料を調達するのである。

... I kept my workshop of filthy creation: my eyeballs were starting from their sockets in attending to the details of my employment. The dissecting room and the slaughter-house furnished many of my materials; and often did my human nature turn with loathing from my occupation, ... (56)

さらにヴィクターは人造人間の伴侶を半分創りながら、そのようなことをすれば子孫が地上にはびこるのではとの危惧から、造りかけたものを壊してしまう。そして、その処分を行う際には、

... and for that purpose I must enter the room which had been the scene of my odious work, and I must handle those utensils, the sight of which was sickening to me. ... The remains of the half-finished creature, whom I had destroyed, lay scattered on the floor, and I almost felt as if I had mangled the living flesh of a human being. (212)

といった様子が描かれている。

こうしたヴィクターの所為は、まさにハーンがヘブライ思想にみている「人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者」にあたるといえよう。先に参照したごとく、「死者の骨に霊を吹き込み、蘇らせる」ことは、まさに神のみ、それもイスラエルの民が長年にわたる苦難のなかで育まれた唯一の神なればこそ為しうる業なのである。ヴィクターは、そうした神の領域を犯し、命を創り出すのみならず、創りかけた人造人間の女を処分してしまう行為にまで及んでいる。ハーンがいうヘブライ的意識・感覚からすれば、その罪は極めて重いと云わざるを得ない。

そうした罪を犯したヴィクターは、その報いを受けることになる。長い辛苦の後、人造人間を創りあげた彼は、自らの行為がなした結果、不気味さと醜悪さに慄然とする。

Oh! no mortal could support the horror of that countenance. A mummy again endued with animation could not be so hideous as that wretch. I had gazed on him while unfinished; he was ugly then; but when those muscles and joints were rendered capable of motion, it became a thing such as even Dante could not have conceived.

... Mingled with this horror, I felt the bitterness of disappointment; dreams that had been my food and pleasant rest for so long a space were now become a hell to me; and the change was so rapid, the overthrow so complete! (61)

そして、いたたまれず逃げ出し、偶然友人クラールと出会うことで瞬時の救いを感じるが、神経性の熱病にかかり、数ヶ月床につくことになる（63-65）。ここはヴィクターが受ける最初の報いがみられる箇所といえようか。

やがてヴィクターの病は癒えるが、父からの手紙が届き、ヴィクターの幼い弟が、何者かにより絞殺されたことが告げられる。家族のいるジュネーブへ急ぐヴィクターは、弟への弔意を抱きつつアルプスの山野をさまようが、人造人間の姿を目にする。その刹那、奴こそが弟を殺したのだという確信をもつ。

The figure passed me quickly, and I lost it in the gloom. Nothing in human shape could have destroyed that fair child. *He* was the murderer! I could not doubt it. The mere presence of the idea was an irresistible proof of the fact. ...

... Alas! I had turned loose into the world a depraved wretch, whose delight was in carnage

and misery; had he not murdered my brother? (84-85)

ここにおける弟の死も、ヴィクターに課せられた報いとみることができよう。

実家に戻ったヴィクターをさらなる不幸が待ち受ける。弟の殺害事件において、ヴィクターの実家で愛すべき使用人であったジュスティーヌが、無罪の罪に問われてゆく。実家の養女として、幼いときよりヴィクターとともに育ったエリザベスが懸命の弁護を行うにもかかわらず、ジュスティーヌは絞首台の露と消える。

From the tortures of my own heart, I turned to contemplate the deep and voiceless grief of my Elizabeth. This also was my doing! And my father's woe, and the desolation of that late so smiling home—all was the work of my thrice-accursed hands! Ye weep, unhappy ones; but these are not your last tears! (101)

このように、身近な者の死について、ヴィクターは深い罪の意識を感じてゆく。しかも、この悲しみ、不幸がこれで終るのではなく、さらなるものがもたらされるであろうことを予感している。

こうしたなか、ヴィクターはアルプスの溪谷をさまよひ、大自然のなかで一時の安らぎを得る。しかし、そこで想像以上におぞましい容貌の人造人間と遭遇することとなる。怒りと憎しみに駆られた彼は、嫌悪と軽蔑の言葉を発する。それに対して人造人間は

'All men hate the wretched; how, then, must I be hated, who am miserable beyond all living things! Yet you, my creator, detest and spurn me, thy creature, to whom thou art bound by ties only dissoluble by the annihilation of one of us. You purpose to kill me. How dare you sport thus with life. ...' (117、下線部筆者)

というふうにヴィクターを糾問してゆく。「人間たちから憎まれるべき姿としての俺を創ったのはお前だ。それなのに、お前は俺を殺すという。よくもそこまで生命をおもちゃにできるものだ」という人造人間の言葉は、ヴィクターが犯した罪を問いかけるものとなっている。ここには、生命の創出は神の領域に属するものながら、それを侵犯したのみならず、生命の剥奪をも意図することは、不遜極まりない行為として問い詰められている様子がみられる箇所といえよう。ヴィクター自身、少年時代に訪れていた溪谷の変わらない風景を目にしながらか、「I was a wreck...」「私は敗残の身」(110)と感じているのである。

苦悩するのはヴィクターだけではない。人造人間も覚醒後いかに苦悩に苛まれたかを、ヴィクターを導いた山小屋で語ってゆく。意識をもった彼は、通常の間人と接するも、醜悪な姿のため酷い目にあわされる。偶然、不幸に耐え、思いやりをもって暮す一家を目にし、「この人たちとならば」との期待と誠意をもって接しようとするが、激しく殴打され逃走するしかなかった。このことを話した後、人造人間はヴィクターに叫ぶ。

‘Cursed, Cursed creator! Why did I live? Why, in that instant, did I not extinguish the spark of existence which you had so wantonly bestowed? I know not; ...

‘... There was none among the myriads of men that existed who would pity or assist me; and should I feel kindness towards my enemies? No; from that moment I declared ever-lasting war against the species, and, more than all, against him who had formed me, and sent me forth to this insupportable misery. (165-166)

「遊び半分で創った存在なら、なぜその場で消してしまわなかったのか。耐えられない悲惨の運命へと送り出した者に、永久の宣戦布告を行う」と言う人造人間から、聖域を侵した罪は、行為者のみにとどまらないことが伝わってくる場面といえよう。

さらに、人造人間は、森の中で河に落ちた少女を懸命に救い、介抱するも、後からやって来た男が少女をひったくり、自分に向かって銃撃してきたことを語る。善意と人命を救った報いとして、自分が受けた行為に対し、彼は永遠の憎悪と復讐を誓う (171-172)。ジュネーブにたどり着いた彼は、偶然近くに来た幼子を見て、「先入観や偏見に染まっていない幼児ならば、教育により自分の仲間となり得るのではないか」と考える。そして、その子に声をかけるも、やはり恐怖と嫌悪を向けられてしまう。しかも、幼子がヴィクターの実家フランケンシュタイン家の者だと知った彼は、幼子の殺害に及ぶ。そして、幼子が首にかけていた小画像を、近くで見つけた娘の衣服にしよばせ、彼女に幼子殺害の咎をさせるのである (173-175)。

こうした行為に及んだ後、ヴィクターと会った人造人間は、自分の伴侶を造るようヴィクターに求める。「自分の創造主たるお前には、その義務があるはずだ」と追及されたヴィクターは、それを承諾する。英国でその仕事にかかるべく、ヴィクターは親友クラールとともに、ジュネーブからロンドンへと旅をする。道中の景観や歴史に感銘を受けるも、ヴィクターは“*But I am a blasted tree; the bolt has entered my soul; ...*” (199) という状態であった。英国北部のオークニー群島で人造人間の伴侶を創ることになるが、伴侶を創ることはより危惧すべき事態を招くことになりはしないかという懸念をヴィクターが感じたまさにその時、人造人間が実験室の窓から覗く。ヴィクターは、その顔に悪意と裏切りを感じ取ってしまう。そして、創りかけていたものを引き裂く (207)。ここには、「本来神の領域である生命」を弄ぶ罪を再び犯すヴィクターがみられよう。島からひきあげるに際して、実験室を片付ける場面では、半できの怪物の残骸が散乱しており、ヴィクターも「人間の生身の肉を切り刻んでいたかのような気持ち」におそわれるのである (212)。このあたりは、本稿にて先に触れたとおりである。ヴィクター自身は、「最初に創ったのと同じ悪鬼をさらに創るのは、もっとも卑劣で極悪極まる利己的行為であると、思いを固めていた」 (213) のであるが、実験室から持ち出した残骸を石とともに籠に入れ、海へ投棄すべくボートで漕ぎ出すところでは、

The scene was perfectly solitary: a few boats were returning towards land, but I sailed away

from them. I felt as if I was about the commission of a dreadful crime, and avoided with shuddering anxiety any encounter with my fellow-creatures. (213)

というふうに、自己における罪を感じている様子がかがえるのである。

籠を投棄した後、ヴィクターは海の流れに身を任せる。海上での死をも覚悟するが、ボートはアイルランドに流れ着く。そこでは、絞殺事件の直後であり、ヴィクターに嫌疑がかけられる。しかも被絞殺者は、ヴィクターの親友クラーバルであった。これを知ったヴィクターは、ショックから熱病に倒れる。

I lay for two months on the point of death: my ravings, as I afterwards heard, were frightful; I called myself the murderer of William, of Justine, and of Clerval. Sometimes I intreated my attendants to assist me in the destruction of the fiend by whom I was tormented; and at others, I felt the fingers of the monster already grasping my neck, and screamed aloud with agony and terror. (221)

そしてこのように、自らの罪責を認めるかの如く、うわごとを発するのである。現地の治安判事の取り計らいで無罪とされ、ヴィクターの父が当地に赴く。しかし熱病後、ヴィクターは麻薬を服用するようになる。それでも、彼の心は一時も安らぐことはなく、不安とおびえに苛まれてゆく (230)。

帰国したヴィクターは、幸福を取り戻すべくエリザベスと結婚する。しかし、苦悩と不安に満ちたなかでの婚礼であり、ヴィクターは人造人間が企てる復讐に細心の注意を払う。にもかかわらず、婚礼の夜、エリザベスは殺害される (244)。ヴィクターの父も、身近な人間が次々と殺害され、不幸がもたらされることに耐え切れず、死んでゆく (244-247)。

かくなるうへは、自らの過ちに自ら決着をつけるのみと、ヴィクターは人造人間を追跡する旅にでる。それは、地中海から黒海、コーカサス、ロシア奥地を抜け、氷におおわれた北方へ至るものであった。ヴィクターは、これを「私を守る霊たちがもたらしてくれる巡礼の旅」(255) と考える。ここにも、「神の領域を侵した者における贖罪」の意識が看取されるように思える。

しかし、氷の海で彼は力尽き、冒険家ウォルトンの船に救助される。これまでの経緯と思いをウォルトンに話したヴィクターは息を引き取るが、そこに人造人間が姿を現す。ヴィクターから聞かされていたことについて非難の言葉を発するウォルトンに、人造人間は、ヴィクターへの復讐として、罪のない人間を殺害したことに対する後悔と苦悶を訴える (275)。そして、自分の生命を自ら絶つことを告げる。

I ... shall seek the most northern extremity of the globe; I shall collect my funeral pile, and consume to ashes this miserable frame, that remains may afford no light to any curious and unhallowed wretch, who would create such another as I have been. I shall die. ... He is dead

who called me into being; and when I shall be no more, the very remembrance of us both will speedily vanish. ... Some years ago, when the images which this world affords first opened upon me, when I felt the cheering warmth of summer and heard the rustling of the leaves and the warbling of the birds, and these were all to me, I should have wept to die; now it is my only consolation. Polluted by crimes, and torn by the bitterest remorse, where can I find rest but in death? (278)

ここで人造人間が述べることは、名門の出にして俊才であった人間が、ヘブライ思想の影響下にて禁忌とされてきた領域を侵犯し、以降は苦悩の人生であったが、それに巻き込まれ誕生した人造人間も、本来有していた善意や理性にもかかわらず、不幸に苛まれ、周囲も不幸に引き込む存在になってしまった。そうした存在、苦悩の終焉は死でしかないのだ、ということになる。その後、人造人間は氷のいかに乗ると、闇の中に姿を消してゆく。

こうした *Frankenstein* について、ハーンは次のように解説をしている。

A History of English Literature の “The Romantic of Mystery and Horror” では、「怖がらせて楽しむという文学趣味は、バイロン (George Gordon Byron) の時代か、それを少し過ぎる頃まで続くが、ゴシック、つまり中世的なものへの憧憬はロマンティズムの萌芽になり得るものを持っていた」(415 筆者要約) との見解を示し、ハーンがゴシック・ロマンスの作家として評価しているマーチュリン (Charles Robert Maturin) の影響がメアリー・シェリーにみられるとしている (417)。

また “Minor Novelists” の章でハーンは、*Frankenstein* が ‘moral tale’ として成功したと記している。

Her story is the story of a young student called “Frankenstein,” who has discovered how to make a man by chemistry: he tries to make a very beautiful man, but he only succeeds in making a very frightful monster. The story has been especially successful as a moral tale; and by its moral it can never die. (519-520)

さらに “Notes on American Literature” においても、「シェリー夫人などの短編が不滅なのは、それらが素晴らしく教訓的だからである」(755) と述べられている。

このように *Frankenstein* に対して視線を向けるハーンについての考察が、高木大幹による「ハーンと幻想文学 (三) —フランケンシュタイン—」においてみられる。そこにはハーンの『英文学畸人列伝』を参照しながら、生命の創造というモチーフの重大さ、孤独に苛まれる怪物 (人造人間) の苦悩とそれが問いかけてくるもの、ハーンの言う「人間の一つの間違ひが多くの間違ひを引き起こす」点と「すべて大きな真実には、必ず隠れた教訓が含まれていて、作者の手助けなしに語りかける」点が看取されるとしている。そしてクローン人間さえ生み出すかもしれないところまできているバイオテクノロジー等に代表される現代科学に対する警鐘がなされているという見方が示されている。

そして、ハーンは上記の感想に加え、最初にみたように、「人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者は、大変な天罰を受けるのだというヘブライ思想に影響されてきた西洋人における意識」を *Frankenstein* から感じ取っているのである。

III

ここまで、ハーンが *Frankenstein* から感じ取っている「人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者は、大変な天罰を受けるのだというヘブライ思想」が如何なるものか、そして、ヘブライ思想に影響された西洋人の意識が、*Frankenstein* という作品にどのようにみられるか、さらにはハーンの前作に関するコメントを確認、検討してきた。ハーンがなした指摘は、当を得たものといえよう。

だがハーンは、*Frankenstein* という作品の価値を認め、評価しながらも、ヘブライ思想の影響について詳細な解説は行っていない。然るに、*Out of the East* ではその重大さを提示しているのである。ならば、ヘブライ思想の影響といったものが、ハーンによる著述のなかにみられないか、目を向けてみることにしたい。

ハーンの“The Dream of a Summer Day”が、ここでは想起されるべきであろう。これは、「*Frankenstein* にみられるヘブライ思想の影響が、日本人には理解されないようだ」と彼が述べている著書 *Out of the East* における第1章となっている。この中でハーンは、西洋近代文明社会を嫌い、未だそれに染まっていない当時の日本を好ましく思いつつ、浦島伝説の夢に浸ってゆく。だが、

Is it right to pity Urashima at all? Of course he was bewildered by the gods. But who is not bewildered by the gods? What is Life itself but a bewilderment? And Urashima in his bewilderment doubted the purpose of the gods, and opened the box. Then he died without any trouble, and the people built a shrine to him as Urashima Miō-jin. Why, then, so much pity?

Things are quite differently managed in the West. After disobeying Western gods, we have still to remain alive and to learn the height and breadth and the depth of superlative sorrow. We are not allowed to die quite comfortably just at the best possible time: much less are we suffered to become after death small gods in our own right. How can we pity the folly of Urashima after he had lived so long alone with visible gods. (18-19)

と述べ、「神を疑い、神との約束を破った浦島を、どうして日本人は憐れみ、神として奉っているのだろう。西洋では、全く状況が変わってくるはずだ」としている。この箇所が続いて、「浦島が語り継がれてきたのは、時の流れに虚しさを感じず人間を憐れんでいるのだ」といったことが、語られてゆく (19-21)。しかし、ハーンの前作が「思い出の記」において、ハーンは「日本のお伽噺のうちでは『浦島太郎』が一番好きでございました」(34) と言っ

ているように、非常に気に入っている浦島伝説について、ハーンはこうした疑問を口にするのである。ここでいう「神」であるが、「西洋では、全く状況が変わってくるはずだ」という口上からすれば、「絶対的、超越的な神」を意味するかに思われる。だからこそ当惑の中でとはいえ、その意を疑い、約束を破った浦島をなぜ憐れむ必要があるのか、とハーンは考えたのだろう。だが、ハーンは、“the gods”や“visible gods”という表現を用い、キリスト教における唯一神を表す“God”を用いてはいないことに注視する必要があるだろう。

さらに“The Dream of a Summer Day”において、注目しておきたい箇所がある。それは、この手記が書かれた長崎から熊本へ向かう道中（この旅については、丸山学『小泉八雲新考』p.25, pp.60-61, 梅本順子『浦島コンプレックス—ラフカディオ・ハーンの交友と文学』p.135 参照）、雇っていた人力車の車夫が、暑さのため取り決めた距離を走ることが出来ない、と申し出る時である。車夫は、約束の額よりも少ない車代でかまわないと言う。ハーンは、車夫を雇った時、旅館の女将が七十五銭だと言ったことに触れるが、

“Seventy-five sen, she told me,” I observed; —“and that promised to be done has not been done Nevertheless, seventy-five sen to you shall be given, —because I am afraid of the gods.”(27)

と、「私は神が怖いから、約束の額を払おう」と言うのである。この直前には、「雨乞いの太鼓の音から龍王の娘を思う」記述もみられるが、ここは、この章の最終部である。そこにこうした言葉を持ってきたハーンには、やはり神を意識した約束の遵守という意識が深くあるのではなからうか。それは「全てを見通す神」、即ち「絶対的、超越的な神」を思わせる。しかし、ここでも“God”ではなく“the gods”とされている。この点は、再度確認しておきたい。

このようにみえてくると、ハーンの神に対する意識は複雑かつ微妙な様相を呈しながらも、現実的な規範よりも高い次元での責任・義務の履行を考えるハーンを見出すことができようかと思う。そこには、実世界を超越した神に対する畏怖も伝わってくる。そうしたハーンからは、“the gods”としながらも、超越的、全能的なるがゆえに、一神教における神のイメージに近いものが感じられる。

次に、ハーンの *On Poets* における“Studies in Browning”に目を向けてみることにする。ここにも、詩人ブラウニング (Robert Browning) をとおして、絶対的、超越的な神を是認するハーンがみられると思われるからである。

ブラウニングという詩人については、「・・・ロマンティックな耽美主義的感情と社会的義務感の相克は、ブラウニングにもはっきりと現れて・・・」(『イギリス文学史序説』351) おり、1833年の処女作 *Pauline* における「この詩の語り手の病的なほどの自己耽溺の傾向は、ブラウニングの中にあるロマン主義的体質も如実に物語るものである」(同 351) とされる。そして、今回取り上げてきている *Frankenstein* についても、作品とロマン主義の結びつきは、ほぼ異存なく首肯されるであろう。作者メアリー・シェリーはロマン派の

詩人 P. B. シェリー (Percy Bysshe Shelly) と駆け落ちし、さらにバイロン (George Gordon Byron) なども加わった集いの中で、メアリーはこの作品を手がけるからである。こうした経緯はハーンも *A History of English Literature* のなかで触れている (477-478, 519-520)。よって、*Frankenstein* という作品の背景にロマン主義を認めることは妥当であろうと思われる。こうして、ブラウニングとシェリーは、ともにロマン主義に属する詩人、作家なのである。

ハーンは上記の章にて、人間性に焦点をあて、善行からのみならず悪行からも教訓を引き出せるのであり、そのために性格描写が「劇的」になされるのがブラウニングの詩だとしている。そしてこうした表現技法において、シェイクスピアに似た詩人は、イギリスでは彼以外にはいないと述べる (146)。また、ハーンはブラウニングの詩にみられる人間の悪性、邪悪さというものを取り上げてきているように思われるが、“The Statue and the Bust” 「立像と胸像」というブラウニングの作品も紹介されている。

これは、ある公爵がフィレンツェの貴族の若い花嫁の心を捉えようとし、彼女もそれになびいてゆく。二人は機を窺うも、躊躇しているうちに年月は過ぎ去ってしまうという話である。これについて、ハーンは「悪心を抱きながら、それを行わない臆病さを神は決して許さない」“Never will God forgive such weakness as that.”(164) と宗教的な雰囲気醸し出している点を指摘している。さらに、ハーンは次のように述べる。

But it is also true that there is a higher morality than human codes, and when human law fails to give justice, a larger law occasionally steps in to correct the failure. Browning delights in giving us examples of this kind, extraordinary moral situations, wrong by legal opinion, right by the larger law of nature, which is sometimes divine. (165)

ここでは「人間の法典よりも高次な道義」という超越的な神の存在をほのめかす表現がみられるが、同時に「実定法的観点からすれば過ちであっても、時として神聖である自然な高次の法からすれば正しいという、途方もない道徳的状况の例を、ブラウニングは好んで示す」ことが述べられている。同章において、こうした示唆、指摘に続いて紹介されてゆくの“*Ivàn Ivànivitch*” というブラウニングの詩である。

これは、働き者で正直なイワンという男が、親友の妻を殺してしまう話である。親友の妻は「三人の子供らは狼に食われ、自分だけが櫓で命からがら逃げてきた」と語る。だがイワンは、自分が助かるために、彼女が子供を櫓から投げ落としたのだと見抜き、彼女の首を斧で切り落とす。イワンが逮捕されようとする時、百歳を超えた老司祭が彼を弁護し、法と世論の名のもとに、イワンは無罪放免される (165-166)。

ハーンは、司祭が「母の責任」を語る様子を引用している。

“A mother bears a child: perfection is complete
So far in such a birth. Enabled to repeat
The miracle of life, —herself was born so just

A type of womankind, that God sees fit to trust
Her with the holy task of giving life in turn.

.

...

The mother drops the child! Among what monstrous things
Shall she be classed?"(166)

ここでハーンは、誕生の時に完全は成就すると語る「教皇さま (Pope)」と呼ばれる老司祭をして、キリスト教の観点から話をしていとし、「人間の魂はその種のものとしては完全無欠なもの、完全な霊的実体として創造されており、あとは進歩するも損なわれるもそれ自体の行為にかかっているという、正教的信仰を説いている」(166-167)と述べる。そして「母親は、その子の肉体のみならず、それにかなうように神によって創られた魂をも生み出す。それほどの奇跡を許されている母親も、神託によってそうであるにすぎない。魂の器をつくった後は、その小さな肉体をあらゆる害から護ることが母親の神聖な義務となる」(167)と、老司祭が母親を糾弾する詩の部分引用する。そして、その最後は

“...

Earth open not, neither fell the sky, for prompt was found
A man and man enough, head-sober and heart-sound,
Ready to hear God's voice, resolute to obey.

.

I proclaim

Ivàn Ivànovitch God's servant!"(168)

とされている。この司祭の演説を聞いた農民たちは納得し、イワンに無罪放免が伝えられる。その時イワンは子供と遊んでおり、自分が罰を受けるなどとは露ほども感じていない様子であった。ハーンは「この素朴な心の持ち主にとっては、議論すべきことなど何もない。彼は神が命じたことを行い、自然に反した罪を罰したにすぎない」(168)と説明している。この詩について、ハーンは次のような考察を行っている。

None of his moral teachings are at discord with any form of true religion, yet they are mostly larger than the teachings of any creed. Perhaps this is why he has never offended the religious element even while preaching doctrines over its head. The higher doctrines thus proclaimed might be anywhere accepted; they might be also questioned; but no one would deny their beauty and power. We may assume that Browning usually considers all incidents in their relation to eternal law, not to one place or time, but to all places and to all times, because the results of every act and thought are infinite. (168)

ここには、「ブラウニングが、いかなる宗教の信条よりも広大な道徳的教えを提示しており、そのために宗教的要素を考慮せずに教義を説く際にも、決して宗教的要素を損なうことはなかった。その高次の教義は、受容されることもあれば、疑念を持たれることもあるかもしれないが、その美と力は否定され得ないものである」というハーンによる解釈がみられるのである。

“The Statue and the Bust”では、公爵と彼が自分のものにしようとする貴族の妻との間には恋愛ないし愛欲の感情がみられる。しかるに、躊躇し、徒に年月を重ねる二人は、神の意に反する行為を為した者とみなされるのだ、とハーンは解説する。先にみた「あらゆる大宗教の説くところでは、悪をなそうと欲する者は、そう欲しただけで、実際に悪をなしているのとまったく変わらない」（164）と述べるハーンは

“You can do anything that you please in this world, if you are willing to pay the price, but the price of acts and thoughts is fixed by the Eternal Powers, and you must not try to cheat them.”(165)

とも言っている。ここに読める「永久の主権者（Eternal Powers）」、また先に示した「人間の法典よりも高次の道義（a higher morality than human codes）」という語から、姦通に繋がる恋愛、愛欲という世俗的な要素に加えて、宗教的な要素がみえてくる。しかもそこには、超越的な存在あるいは意思がうかがえよう。このようにみるならば、超越的にして絶対的なるがゆえに唯一の存在としての神を生み出したヘブライ思想につながる面が伝わってくるように思われる。

“Ivàn Ivànovitch”に至ると、宗教的・道徳的色彩はより一層強まる。一見無骨そうにもみえるが、宗教的、道徳的には曇りのないイワンという男、周囲から教皇と呼ばれる老司祭、そして両者を通して、現実の規範を超えたところでなされる真実と正義の実現、ここには神の祝福とさえ言ってもよいほどの光景が展開されているかのようである。

「教皇さま」とよばれる老司祭の登場は、キリスト教的世界が展開されているように感じられるが、本稿においてみてきたごとく、キリストにつながる超越的にして唯一の神は、イスラエル即ちヘブライ世界において形成されてきたものである。よって、ここにおいても、ヘブライ思想の影響が背景に感じるができないであろうか。

このように、ハーンが *Frankenstein* に感じていたヘブライ思想の影響と言い得るものが、ハーンによる詩人ブラウニングの解説からも伝わってくるといえようか。また、ブラウニングとメアリー・シェリーはロマン主義に属すること、先に記したとおりである。ならば、ロマン主義の詩人・作家にもヘブライ思想の影響はうかがえるとみることもできよう。

そしてブラウニングの詩についても、“The Statue and the Bust”から “Ivàn Ivànovitch”にかけては、前者において、「永久の主権者」、「人間の法典よりも高次の道義」といった表現がみられ、詩の内容が宗教色を強めてくる。そして、後者においては、「宗教的、道徳的に曇りのないイワン」と救うのは、「教皇とよばれる老司祭」である。つまり、ブラウニングに

よる詩をハーンが紹介してゆくなかで、道徳、宗教という要素がクローズアップされており、「教皇と呼ばれる老司祭」が登場する。この人物は、キリスト教即ち一神教を象徴しているのである。

しかしハーンは“The Dream of a Summer Day”において、“God”ではなく“the gods”等としていること先の通りである。従って、ハーンの宗教観は非常に微妙なものに思われてくる。それは、必ずしも唯一神ではないが、悪しきものを看過せぬ超越的な存在に近い神ということになるだろうか。このあたり、先にみたユダヤ教生成過程における神に近い存在を感じ取ることはできないだろうか。即ち、ヘブライ人が放浪、奴隷、捕囚といった民族的苦難のなかで、最初は家族共同体を率いた族長の神から、次第に、民全体の苦難に対して支えとなる超越的存在となりながらも、完全な唯一神とはなっていない段階における神とでもいべきイメージである。

また、「キリスト教に対して疑念を抱くハーン」は、確かに認められるところであろう。それについては、彼の作品“A Conservative”の主人公である青年が、幕末から明治初期に西洋列強に接し、一度はキリスト教に傾倒しながら、その墮落を目の当たりすることにより、日本の古きものの中に価値を見いだしてゆこうとする姿や、“The Case of O-Day”において、寄り辺ない身のお大という女に「改宗すれば、助手として雇う」ともちかけるキリスト教宣教師が登場していることなどから推察されよう。後者については、『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解—』で、お大が位牌を捨ててしまうことについて、世間からの非難を通して、ハーンにみられる祖先崇拜への関心とともに、宣教師に対するハーンの批判的視線が、著者平川祐弘により注目されている(259-262)。そして、ハーンのキリスト教不信の根底をなすもののひとつは、その幼児期に、彼の母と父方一族との間にみられた宗教的確執であろう(Frost 26)。しかし、「ハーンという人間が、キリスト教を根底から全て否定していたか」ということについては、本稿でみたところから首肯するのは難しいのではなかろうかということも指摘しておきたい。

ハーンは幼少時、母親と父方一族との宗教的確執を経験していた。そして母親が幼いハーンを残してギリシャへ帰った後、彼の大叔母ブレナン夫人(Mrs. Brenane)がハーンの養育にあたった。彼女は「典型的なヴィクトリア時代の未亡人」(Cott 14)であり、ハーンに「礼儀正しきや品行方正」(Frost 38)を求めたといわれる。この夫人の存在が、キリスト教についてもハーンに好ましからざる影響を与えたのではとされるが、こうした点についてポール・マレイ(Paul Murray)は

From the earliest Hearn biography to the present day, Mrs. Brenane has been cast as a bigot with the vengeful zeal of the convert, imposing rigid Roman Catholicism on her unwilling charge. Closely examined, the evidence suggests the opposite: in her care, young Patrick enjoyed a life of cultured leisure with, critically, untrammelled access to books of all sorts. (15-16)

とブレナン夫人の下での生活が、必ずしもハーンにキリスト教を嫌うようにさせるものではなかったと指摘している。もっともマレイは、後年、寄宿学校での宗教教育の影響は大きかったようだとしているが(16)。こうしたあたりに、ハーンの意識における深層部にキリスト教的な素養が育まれていった一因があったのかもしれない。

IV

それでは、ハーンが *Frankenstein* から感じ取っている「人間の生命の根源、神の禁断が途轍もないものであること、自然における神秘のベールを暴こうとしたり、無意識であっても、嫉妬深い創造主を揶揄したりする者は、大変な天罰を受けるのだというヘブライ思想と、ヘブライ思想に影響された西洋人の意識」という面から、今日的課題を見出すことはできないであろうか。

2014年に注目されたニュースとして、「STAP細胞問題」があった。これは以下のようなものである。

理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの小保方晴子氏と笹井芳樹副センター長らが、体の細胞に刺激を与え新たな万能細胞「STAP細胞」を作ったと1月30日付の英科学誌ネイチャーに論文を発表した。画像や文章の流用などが相次いで発覚、理研の調査委員会は小保方氏に捏造や改ざんがあったと認定した。理研の改革委員会は、笹井氏の「責任は重大」と指摘し、センターの解体を提言した。ネイチャーは7月に論文を撤回した。STAPの有無を確かめる理研の検証実験が、小保方氏も参加して進められている。(山陽新聞2014年8月6日、第1面)

そして、同日付同紙は「理研・笹井氏が自殺」を報じている。笹井氏については、「……近年は脳の下垂体や目の網膜の立体組織を試験管内で作ることに世界で初めて成功」した「生命科学のトップ研究者」(同紙第3面)とされている。そうした彼も「笹井氏と共同研究したこともある中辻憲夫京都大学教授は『間違ったら処分を受けて反省し、本来の活動を再開すればいい。管理に問題があれば改善すればいい。それをせずに実験を進めるなど内部では混乱が深まったのではないか』と話す」(同紙第3面)状況下であったか、自殺するのである。

STAP細胞問題とトップ研究者の自殺は、生命の謎に迫ろうとする点と、それに関連して起る不幸という点で、今回取り上げている *Frankenstein* と重なりはしないだろうか。現代という時代と医学・科学における進歩と成果等を鑑みるならば、安易な連想は慎むべきであろう。しかしながら、*Frankenstein* という作品が包摂し、そこからハーンが感じ取った「生命を司ることは神の領域であり、そこを侵す者は神の怒りを買うことになる」という教訓は、この問題との重なりの中かで再認識されて然るべきではなからうか。

また、遠藤周作著『海と毒薬』は、戦時下、捕虜に対してなされた「どれくらい血を失えば、人間は死ぬのか」という生体実験を題材としていることは、よく知られているところである。

よって、そこにも本稿にて検討してきているテーマにつながる要素「神の領域であるべき生命への不遜な態度」がみられよう。

同著第二章では、「医学生のはく」が過去に犯した罪を告白してゆく様子が描かれている。そのなかで中学生だった「はく」は、博物の教師が大切にしている昆虫の標本箱を盗むが、別の生徒に疑いがかけられ、罰を受ける話が語られている。「はく」は、その夜歯の痛みを覚え、夢の中にその同級生の姿をみるが、その彼が仲間たちから英雄扱いされているのを見ると、心の呵責も不安も驚くほどの速さで消えていってしまう……。 (107-111) そして「はく」は次のように思う。

……長い間、はくは自分が良心の麻痺した男だと考えたことはなかった。良心の呵責とは……子供の時からはくにとっては、他人の眼、社会の罰に対する恐怖だけだったのである。勿論、自分が善人だとは思ってもしなかったが、どの友人も一皮むけば、はくと同じだと考えていたのだ。偶然の結果かもしれないがはくのやった事はいつも罰を受けることはなく、社会の非難をあびることはなかった。(111)

また「はく」は、姦通の罪を、従姉を相手に犯してしまうが、従姉はその夫を軽蔑しており、自分の過ちを告白することはないだろうとの確信のもとに、すっかり安心した気持ちで「自分が破廉恥な男であり、一人の男を一生、裏切ったという考えさえ起きなかった」(114)のである。さらにミツという女性を妊娠させ、その娘を死なせるかもしれない危険な方法で一方的に墮胎させてしまうが、ミツの苦しみを考え自分が悪いことをしたと思いながらも「……それほどの苦痛感には起きてこなかった。」(116)のであり、「……烈しい責任感さえ感じなかった……」(115)のであった。そしてそれらの出来事を醜悪だと思いつつも「……醜悪だと思ふことと苦しむこととは別の問題だ。」(116)とし、以下のような心情を吐露する。

……なぜこんな手記を今日、はくは書いたのだろうか。不気味だからだ。他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感じず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味になってきたからだ。

不気味といえば誇張がある。ふしぎのほうがまだピツパリする。はくはあなた達にもききたい。あなた達もやはり、はくと同じように一皮むけば、他人の死、他人の苦しみに無感動なのだろうか。多少の悪ならば社会から罰せられない以上はそれほどの後ろめたさ、恥しさもなく今日まで通してきたのだろうか。そしてある日、そんな自分がふしぎだと感じたことがあるだろうか。(117)

この後「はく」は空襲の夜、「……いつか自分が罰せられるだろう。」(118)という実感を持ちながら、捕虜の兵士を実験材料にする手術への参加を承諾していくのである(118-119)。

遠藤周作は、「日本人の心理構造」とでもいうべきものを、この作品で問いかけているように思えるが、ここでは「世間という外面的強制力を意識して行動する」姿がかなり如実に示されているといえよう。『海と毒薬』では、第二章に、不幸な過去を持つ看護婦の告白が記されているが、そこには助かる見込みのない患者に自棄的な気持ちから安楽死させようとするこの看護婦に対して、医大病院の部長医師の妻であり、看護婦の経験をもつヒルダというドイツ人女性が行いを止め、看護婦を詰問する場面がみられる。そこでヒルダは彼女に向かい、

「死ぬことがきまっても、殺す権利はだれにもありませんよ。神様がこわくないのですか。あなたは神様の罰を信じないのですか。」(92)

と非難の言葉を発する。しかし看護婦は虚無的な可笑しさを感じ、偽善的ではないかと感じていたヒルダへの感情もあってか、米国人捕虜の手術に同じ白人であるヒルダの体を思い浮かべ「彼女の右手、うぶ毛のはえた西洋人の女の肌、あれと同じ白人の肌にやがてメスをいれるのだなとわたしは考えました。」(97)という思いをもって手術への参加を受け入れてゆくのである。

『海と毒薬』からは、一神教世界に身を置いてきたヒルダと日本人看護婦の意識が対照的に描かれている。「一神教世界ゆえに生命への不遜な態度はない」とはいえないはずである。スポーツ界において、薬物を投与して運動能力を高めるドーピングは、そのリスクとともに問題視されてきたが、欧米という一神教世界においても行われてきたことは、これまで報じられてきているところである。しかし、『海と毒薬』では、「超越的、絶対的な神を仰ぐ一神教世界と、そうでない世界では、罪の意識に差がありはしないか」が、問いかけられているといえよう。こうした点も、今という時代、グローバル化された時代においては、考えられるべきテーマではなかろうか。

Works Cited and References

- Cott, Jonathan. *Wandering Ghost*. New York: Alfred A. Knopf, 1991.
- Frost, O.W. *Young Hearn*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1958.
- Hearn, Lafcadio. *A History of English Literature*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hosuseido Press, 1953.
- . "A Conservative." *Kokoro*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.
- . "The Case of O-Day." *The Japanese Miscellany*. Tokyo: ICG Muse, Inc., 2001.
- . "Studies in Browning." *On Poets*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido press, 1941.
- . *Out of the East*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.
- . "'Monks Lewis,' and the School of Horror and Mystery." *Some Strange English Literary Figures of the Eighteenth and Nineteenth Centuries*. Ed. R Tanabé. Tokyo: The Hokuseido

- Press, 1927.
- Murray, Paul. *A Fantastic Journey*. Sandgate: Japan Library, 1993.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. London: Penguin Books Ltd., 2006.
- Ban, Stephen. 編 遠藤徹訳『怪物の黙示録』 青弓社, 1997.
- 荒井章三 『ユダヤ教の誕生 「一神教」成立の謎』 講談社、2013.
- 遠藤周作 『海と毒薬』 角川書店、1999.
- 梅本順子 『浦島コンプレックス—ラファディオ・ハーンの交友と文学』 南雲堂、2000.
- 榎本眞理子 「モンスターが目覚めるとき—フランケンシュタインとは誰か」『イギリス小説のモンスターたち—怪物・女・エイリアン』 彩流社, 2001.
- 小泉節子 「思い出の記」『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』 小泉節子・小泉一雄 株式会社恒文社、1987.
- 高木大幹 「ハーンと幻想文学（三）—フランケンシュタインについて—」『へるん No. 37』 八雲会, 2000.
- 平川祐弘 『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解—』 中央公論社、1992.
- 丸山学 『小泉八雲新考』 講談社、1996.
- やなせたかし 「今なぜフランケンシュタイン 第一回」『詩とメルヘン 5月号』 サンリオ社、1991.
- 「今なぜフランケンシュタイン 第二回」『詩とメルヘン 6月号』 サンリオ社、1991.